

《選評》 いしい しんじ（作家）



第5回を迎えた本年度は、どの部門でも、作品のレベルがいちじるしく高かった。すばらしい作品を寄せてくださったすべての応募者に、まずはここからの拍手を送りたい。

中高生部門。

「文月の影響」は、一文一文、歩を進めるようにつづられる、落ちついた書きように好感をもった。先達の文学者・志賀さんに導かれ、十五歳の主人公・冬馬は、堀辰雄、漱石、さらに京都に縁のある文人画家の気配をたどる。

読み進むうち、「もう一步、踏みこんでほしい」と感じた。冬馬がどんな人間か、どんな生を生きてきたか、なぜこんなに日本文学（京都文学）にひかれるのか。とりわけ、くりかえし語られる「火」について。志賀さんたちとはちがい、冬馬はこの世でいのちを燃やし生きているはずだ。その火の色、勢い、熱量はどんなだったろう。過去に生きた文人の影でなく、冬馬でしかない、その生、いのちのありようをこそ見せてほしかった。

「十年で二日の修学旅行」。教師になった現在の晶子、中学生だった十年前のしょうこ、それぞれの修学旅行が、みずみずしい文体で交互にかたられる。やがてしょうこの身とその友人の身にふりかかった事件が明かされる。

とちゅう、時間の転換があまりにめまぐるしく感じた。プロットの都合に合わせ、ところどころ自然に流れていない箇所も見受けられた。

ただ、事故の場面の筆致は、それらを振りはらって断然力強い。ここだけはぜったいにブレるものか、ぜったいに書ききってやる、という気迫を感じた。著者は勇気をふるい、文学にむかって、ことばをこえた一步を踏みだしている。その一步をことほぎたい。

「みーちゃんのメガネ」。読みはじめて、すぐさま余白に「とてもいい」「たのしい」と書きつけた。小学生から高校生への、きわめて自然かつユニークな描写にいろどられた時間の移行。こなれた文体、メリハリのついた展開。

「はっきりしたものを見ない」というみーちゃんの抵抗は、読んでいて、応援したいきもちが胸にあふれた。「医師の判断で抵抗をあきらめる」という、みーちゃんの現実的な対応は、「禿が見える」という超自然的なできごとと、ちょうどよくバランスが取れていた。

最後の一文のみ、不要だったかもしれない。それまでのことばは、一文ずつ一語ずつ、まるでいきものようにわかちがたく、有機的につながりをたもっている。

ひとことでいえば、小説を書く才能にあふれている。このレベルの作品を、いくらでも書けそうな気さえする。著者の今後に、いち読者としてここから期待したい。受賞、おめでとうございます。

海外部門。

「この花、ここで咲くわけでは」。立ち飲み屋「玉久」にかよう語り手。常連客のどら声、たちこめる煙。京都の飲み屋にながれる独特の空気感を、冷静な観察眼でこまやかにとらえた。

ぽつぽつと語られる独白のリズムは、まるでカウンターに座った酔客の、リアルなつぶやきのようにひびく。常連ムーさんへの淡い思慕も、酔っぱらった際、みずからの輪郭がいまいになった状態ととらえてみれば、きわめて自然な描写にうつる。

数行ごとに文章のかたまりをつくり、1行ずつスペースをあける、という特徴的な表記を、じゅうぶんに生かしきれていない印象を途中でおぼえた。目の前にみえている風景ばかりでなく、遠い記憶も混ぜこみ、小説の光や音をよりバラエティゆたかにする手もあったと思う。冒頭の、動物が水を飲む場面と立ち飲み屋の関係がわかりづらかった。作品の半ばで、店のテレビに映る映像として登場させたほうが効果的かもしれない。

「そしてまた続く」を、たいへんおもしろく読んだ。全編に、著者の内面からもれだす煙のような、ふしぎな文学的空氣がたちこめている。「湯氣」といったほうが的確かもしれない。

冒頭から、バスタブ、飛びこみ、温泉に河童と、「水」にまつわるイメージが重ねられる。外国人旅行者への不平、スズメへの愛着、少年時代の思い出。思考の断片を接ぎ木していくような、バラバラなことばの連なりを、文学的湯氣がつつんでいる。独特なその読み心地は、「不機嫌なゼーバルト」とでも呼んでみたくなるほどだ。

ゲルダとの観光、マティアスとの別れを経て、語り手は、通底するいらだちのさらにその向こうに、希望の光としての、あらたな「スズメ」を見いだす。みごとなラストだと感じいった。文学に関する教養のみならず、他者にむけられた著者の深い洞察、共感の力に胸をうたれた。受賞、おめでとうございます。

一般部門。

「白鷺と新緑」。冒頭から引きこまれた。小学生ふたりの息づかい、存在していることのみずみずしさに圧倒された。

自分たちの生きているこの世の一部を切りとろうと、カメラを構え、ファインダーをのぞき、全身でシャッターを切る。その瞬間の描写。ふたりは、彼らをとりまくひとたちは、そうしてぼくたちは、こんなうつくしい世界に生きているのか、とあらためて教えられる。

二章、三章と、成長してからのふたりの暮らしが語られるが、その姿が少しぎごちないように感じるのは、ストーリーの展開に合わせるため、恣意的に動かされているようにみえるからかもしれない。CM映像の上で石田くんの音と結の写真が結びつく展開は、とちゅうから予想され、また、そちらへ誘導されている感覚もあって、小説の驚き、という点では少しものたりなかった。

石田父、澤井さんなど、ふたりをとりまく大人たちは、こども時代のふたりと同じく、自然に、生き生きと書かれている。ストーリーにしばられず、著者自身が自由に、書くよろこびをうたいあげれば、よりすばらしい、読むよろこびに充ち満ちた作品になったはず。次回作、期待しています。

「波のゆく先」こそ、読むよろこびに満ちあふれた一作だった。

冒頭の擬音語は適当でなく、璃子が（背後で著者が）、じっと聞き耳を立ててかいている。とても耳がよい。だからこそ書ける、小学生の京ことば小説。京都の小学生ってみんなラッパーやん！

勢いがあるばかりではない。一文一文の閃き、語と語のつながりもナチュラルかつセンスにあふれており、文字を追っていくだけで心身とも心地よくわきたつ。通奏低音のようにひびく「プール 安徳帝 肉親の水死」のテーマも、絶妙の間合いで、小説内をゆらゆらと浮き沈みし、自然なサスペンスをうみだしている。

東京からの転校生、佃くんのやさしさ、小気味よい辛辣さが、まるでともに教室に座っているかのようにリアルに感じた。同級生たちがつぎつぎと自爆していくさまには大いに笑った。璃子と佃くんの距離が縮まっていく描写の絶妙さ。ふたりで手がける漫画の、波の下の京都が、できあがっていくプロセスのワクワク感。どれをとっても忘れがたい。

共作を諦めざるを得なくなるところは本気でくやしかった。それくらいふたりの姿がうつくしく、尊く感じた。六年間最後の運動会の場面。赤と白の旗。「安徳天皇が死んでもいい世界や、と思った」の一文に、はげしく胸を揺さぶられた。璃子の、小説の「終わり」を感じとったのかもしれない。

すばらしい小説。最優秀としても、十二分な作品、と思った。今後を、ここから期待しています。

「レッツ・オバンギャルド」は、きわめて読みごちのよい作品だった。著者がここから楽しみ、書く喜びをメーターいっぱいには保ちながら最後まで書ききっている。その素直な楽しさ、喜びは、読んでいるこちらの胸に飛びうつらずにはいない。

自転車の教習所、という場所の設定がまずユニーク。福引きで自転車を当ててしまった還暦過ぎの紫香子さん。その「乗れなさ」の描写が、ぎごちない動作、胸のつぶやきふくめ、まるで真横に立ってみせられているかのように的確、かつ笑え、しかもやさしい。

ときおり差しはさまれる、長年の友人Mのエピソード、回想の声。教習所にかよい、少しずつ自転車を前に進ませることができるようになるにつれ（教官との教習の様も見事）、紫

香子さん自身も、生の時間の視界が、じょじょに開けていく。時間の前後関係が、少しまぎらわしい箇所もあったが、紫香子さんの独白の真摯さ、文章のドライブ感で、先へ先へともっていかれる。

ひとつだけ惜しいと感じた点。自転車に乗れるようになる、その喜び、両足をペダルにのせ、ゆるやかにこいで鉄のフレームを前にすべりだせた瞬間の、あの快感について、著者の筆力なら、読者が紫香子さんとともにサドルにまたがり、ともに風をきって進みだしたかのように描写できたのではないか。その瞬間が印象に残っていないのはもったいなかった。

新しい生にむけて、みずからを拓いていくさまを、きわめてていねいな筆致で、こころよく描ききった。きわめて優れた作品だと感じた。受賞、おめでとうございます。

「花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記」。一気に読んだ。読んでいてひたすら楽しかった。きわめて巧みな書き手なのに、その巧みさを前にはおしださず、無理のないまま自然に読者を最後まで導いていく。

一章ごとのエピソードひとつひとつが季節感をはらみ、客観的、かつ彩りゆたかに語られる。そのリズム、つながりの見事さ。

天才肌の源四郎でなく、助手の三左を語り手に据えたことが奏功している。作品内の視野がひろがり、読者がストレスなく物語を楽しめる。

また、絵画や音楽を扱う小説において、作中でどのようにその絵が見え、音楽がきこえるかはきわめて重要。冷静な三左の語りによって、源四郎の作品がまざまざと目の前に立ちあらわれる、そんな視覚的な快感も得られた。

画業を描写するその筆致が、あまた登場するひとびとや、京の街並みを描く際にも、過不足なく活かされている。現実の古都のモチーフを借りて、著者はその見事な筆力と観察眼、絶妙なセンスによって、あらたな京都を物語世界の上に現出させた。そのスケール感も、これまでの応募作にはみられないものだった。

源四郎の絵と、物語の京都に生きるひとびとの姿が重なり、溶けあうラストは、だからこそ感動的だった。この分量を書ききった持続力、目配りも、見事というほかない。最優秀作品にふさわしいと感じた。受賞、おめでとうございます。

《選評》 にし かなこ 西 加奈子（作家）



撮影：若木信吾

初めての選考で、自戒と共に感じたことは、「作者が物語をどれくらい知っているか」が肝だな、ということだった。作品を書くのは作者なので、もちろんその作品のことを知っているのは当たり前なのだけど、「知っている」量が多いほど、あるいはそれをコントロールしようとする意志が強いほど、物語は魅力的なものから遠のくと感じた。ステイヴ・エリクソンの言を借りると、「作家ではなく作品が主導権を握っているのがいい小説」で、私はそれに完全に賛同している。あるいは、もし自分が主導権を握るのならば、徹頭徹尾コントロール仕切って、誰にも文句は言われなほど完璧なものを書くべきだと思う。これは全く好みの問題だから、確固たる意志がある方はもちろん無視してもらって構わない。

<中高生部門>

「文月の残響」

かつて存在していた文士たちの視線を通じて京都を見つめ直す、という野心的な試みは素晴らしい。でも、その試みの強さゆえか、「僕は、何かを“残す”ために、生きていきたいのかもしれない」、「この本は、彼が残した“蔵書”というより、“遺言”に近いものなのかもしれない」などの「決め文章」のようなものが散見され、物語そのものの強度を損なっていると感じた。書く力、そして書きたい力をお持ちなのだから、読者への目配せやサービスは極力控え目にして、物語が要請してくる文章を書いてほしい。

「十年で二日の修学旅行」

硬質な文章で説得力のある物語を貫く、という姿勢は頼もしかった。だが、それ自体が目的になっているように感じた。「あきちゃん」は本当に死ぬ必要があったのか、その出来事は、「二日の修学旅行」をドラマチックにするための仕掛けに過ぎないのではないか、もう一度よく考えてみてほしい。壮大ではなくても、誰かが死ななくても、切実な物語を書くことは、著者には可能だと思う。

「みーちゃんのメガネ」

みーちゃん、という三人称を使用するには、世界観を貫く技術が必要だと思うが、それが非常に良く出来ていた。終始チャーミング、「若い人はみんな黒髪しか生えてこないと思っていた」、なんて最高だった。みーちゃんの成長が、乱視→眼鏡を嫌っての裸眼→はっきり見える裸眼、という流れによって鮮やかに描かれている。それは同時に「子どもの世界」を

失うことでもある。「赤い人」とのエピソードが、それを後押ししているが、わざとらしくない、どこかとても信頼出来る。時折、「大人が言う「本当の世界」を見ないことは、子供のみーちゃんが出来、唯一の抵抗だった」というような、みーちゃんではなく、著者の存在が大きくなってしまっている場面もあったが、それ以上の眩しさがあった。

<海外部門>

「そしてまた続く」

不穏な冒頭から、思いがけない結末への流れは素晴らしい。特に、「京都を汚す」観光客を嫌っていた主人公が、実はかつて隣人の庭を汚していたことを忘れていた、という展開は見事だった（おしっこまでしていたなんて最高だ）。スーツケースについての考察、寺に並んでいる靴たちへの憎悪、雀への愛着など、ハッとする詩的な表現にもたくさん出会えて幸せな読書体験だった。だからこそ、主人公にとって肝心なものになりうるはずの河童の存在が弱くなってしまったのは勿体無いと思った。

「この花、ここで咲くわけでは」

とてもみずみずしく、切実な瞬間を切り取った物語だと思った。ラストシーン、禁煙の札を置いてくる展開は特に心を動かされた。だが、理解するのに時間を要する表現が散見され、もったいなかった。おそらく著者は素晴らしいカメラ・アイをお持ちなのだろう。短編のショートフィルムを見たような読後感だったが、それ故に、これは小説でなければならなかったのだろうか、という疑問が残った。

<一般部門>

「花洛尽～都絵師の洛中外顛末記～」

源四郎、三左、そして彼らを取り巻く人たちのことが大好きになった。最初、登場人物たちのセリフが現代語であることに違和感を持ったが、源四郎の学ぶ「その人の見たい京を描く」「その時代になかったものも描く」という姿勢が、この作品そのものと呼応しているメタ構造なのだと合点がいった。著者は歴史小説を書いたのではなく、青春小説を書いたのだ。ひとつだけ、小梅さんや被差別の人々、それら全てを描きたい、というのは源四郎だけではなく著者の意思でもあると思うが、当事者でない人物がマイノリティを描くときは、心を配っても配っても配りきれない、と思う。これからも、書く側には特権があるのだという覚悟を持って書いてほしい。

「白鷺と新緑」

アイデアも素晴らしいし、ストーリーテラーとして非常に巧みであると感じた。「人工的」ってなんだろう、と考察する場面なども素晴らしい。だが、「物語を成立させる」とい

う目的のために、情景や人物描写のいくつかが、浅い表現で描かれているように感じた。技術をお持ちのはずなので、一文一文を熟考してほしい。また、読者に対する目配せ、サービスが多いと思う。光希に“あそこには色々、忘れ物をしてきた気がするから”など言わせる必要はないし、物語それ自体も、必ずしも綺麗に帰結させる必要はないと思う。もっと読者を信じてほしい。

「レッツ・オバンギャルド」

タイトルを読んだ時、どのような物語であるか予想できてしまったが（中年女性が自分の殻を破るのだろう）、読んでみると、予想を超えた素晴らしい世界が広がっていた。主人公の紫香子さんの描写や来し方に不自然なところがなく、まるで隣にいる誰かの話を聞いているような体温のある親しみがあった。その上、「経済DVを続ける夫から逃れる」＝「離婚はしないが別居する」という行為が、「自転車に乗れるようになる」＝「自転車で移動できる範囲の自由を獲得する」というささやかな行為と呼応していて、物語としても非常に巧みだった。一番に推した作品が最優秀賞を獲って、とても嬉しい。

「波のゆく先」

小学生が語る京都弁を地の文にするのはとても難しい試みだと思うが、璃子の語り口はとても自然で、でもきちんと引っかかるところもあり、素晴らしく機能していた。「ドクターペッパー売ってる自販機」とか、大好き。ただ、時々、「お母さんの腕に抱かれながら、わたしは心の中にあった空っぽの場所が満たされていくのを感じた。そこは、水泳や漫画で必死になって満たそうとしていた場所に他ならなかった」などのような、「これは璃子の気持ちではなく、作者が言いたいことなのでは？」と思う箇所があって悔しかった。誰より登場人物の気持ちに寄り添ってあげられるのは著者であるはずなので、耳を澄ませて書き続けてほしい。

《選評》

めんじょう つよし
校 條 剛

(作家・評論家)



選考会は中高生部門から始めて、海外部門、一般部門の順に選考を行いました。

・中高生部門

『文月の残響』（純）は、いかにも文学青年らしい決意を表明した作品ですが、基本的な知識に欠けているのが残念でした。漱石が京都を訪ねたのが、二回であるとか、谷崎が大阪生まれであるとか、お粗末なミスがあるだけならいいのですが、文学への拘り方が型どおりの面白くありませんでした。ただ、文章の質そのものには将来性を感じさせます。

『十年で二日の修学旅行』（立川夏喜）は、「てにをは」を落とす癖など単純ミスが多すぎます。構成もぎごちなく、読みにくかったのですが、事故で亡くなる親友あきちゃんの描写が生きていると感じました。中高生部門であることを考慮して、「○」を付けました。

『みーちゃんのメガネ』（山本千遥）は最高評価の二重丸（◎）が三人いて、そのうちの一人は私でした。不思議な短篇です。ほとんど掌篇といっていいほど短いのですが、一行ずつ身がぎっしりと詰まっている食べ物ようで、無駄な贅肉が付いていません。みーちゃんが、せっかく作ったメガネを外し、堀川五条の歩道橋の上から目撃する「赤い人たち」が「平安末期の子供のスパイ」だと吹き込まれるところで、この小さなお話はぐいっと宇宙に飛ばされていくような気持ちになりました。作者の腕力を感じさせます。

・海外部門

『そしてまた続く』（ステッグミューラー・アヒム）は、二十年京都で暮らしているというドイツ人の主人公が語り手です。この主人公は「河童」に同化する夢を抱き、スズメへの愛を語り、インバウンド観光客の少なかった、以前の静かな京都を偲んでいます。インバウンドへの怒りで毎日が楽しくないのですが、彼が不幸なのは妻に去られたせいだとあとのほうで告白されます。幼少期から苦手な高齢のドイツ人女性を京都案内しますが、この女性は記憶違いで、幼少期の彼を気に入っていたのではなく、嫌っていたことが判明します。この二つの事実は、ともにラスト近くに語られるので、突然すぎる印象を持ちました。外国人の異郷物は概して、ドラマ性のある「小説」というより「エッセイ」に近いものになります。次に述べるもう一つの候補作『この花、ここで咲くわけでは』（叁朗）のほうに私が軍配を上げたのはそれも理由の一つでした。

『この花、ここで咲くわけでは』は、考えすぎのタイトルでしょうか、内容と一致していると思えませんが、今回の全候補作中、私がもっとも感情移入できた作品で、かなりの傑作と確信しています。

語彙の単純ミスが目につきますが、比喩表現と心理描写に冴えた腕前を見せます。「あの宙で消えてゆく煙のような浅い笑み」とか「卓上の灰皿は裁縫用の針刺しみたいに」などの表現に唸られます。ズブロッカという薬草が入ったウォッカが登場しますが、それを口に含んだときの文章「徐々に口の中の温度になったお酒が豊潤な薬草の味を舌から広めて、やがて和菓子みたいに淡白な甘みが唾液と融合する」。素晴らしい文章です。私もズブロッカはよく飲んだのですが、こんな風に上手には語れなかったでしょう。

京都の雰囲気を感じられないという委員が何人かおられたようですが、露骨に京都であることの証明を求める必要はないと私は考えます。ひょっとすると、立ち飲み酒場にズブロッカなど特殊な酒が置かれているのは、やはり京都らしさなのかも知れません。

心理的なサスペンスを盛り上げる手腕も今回随一の腕前を示していると感じました。雨の日の深夜、ムーさんを自宅に泊め、翌朝を迎えるまでのドキドキ感はなかなかのものでした。冒頭とラスト近くに描かれる、清冽な川の水を動物たちと同じように口をつけるシーンの意味が分からないという意見がありましたが、私にはタバコの煙に汚れた現世界と谷川の夢幻のイメージとの対比が十分に効果を上げていると思いました。タルコフスキーの映画『ノスタルジア』に故郷の風景が何度か無音で挟まれますが、私はそのシーンを思い起こしました。

もう一つの候補作のほうの支持者が多かったために、本作は優秀賞になりましたが、私は今回候補作の中で白眉の一作だと評価します。

・一般部門

『花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～』（おぎなお紺）は、エピソードの連続展開で飽きさせません。ただ、エピソードの強弱の付け方にさらなる工夫がほしいと感じました。本作の山場は源四郎と小梅の結婚、そして公方一族の暗殺になるかと考えますが、特に公方の事件のほうの盛り上げ方に物足りなさを感じます。現場に目撃者がいない状況ではありますが、源四郎や三左の心理的動揺と絶望感を切実に描いていく手立てはあったはずですが、この作者はコトの表面を描くのは得意ですが、内面に入っていく技量が不足しているようです。従って、キャラクターの造形が浅くなってしまうのです。複雑なキャラを要求しているわけではなく、ライトノベル的な類型でいいのですが、さらなる躍動感と生命力を人物に与えてほしいと感じました。また、この作者は京都の古来の生活、風習、行事に知識が豊富なのですが、意外と「時代小説の基本」にはうといのかもしれませんが。源四郎と三左の二十歳のお祝いをすると思いますが、この時代（というか、明治までずっと）元服のお祝いは十代で済ま

せるのが常識です。このような基本中の基本を知らなかったとすると、この作者は時代小説の基本をもっと勉強しなければいけないでしょう。この作品の評価は「○」でした。

『白鷺と新緑』（遊部香）は何よりも茶処宇治を舞台に選んだのがお手柄だったと思います。宇治茶の茶摘みの様子を丁寧に描いているのもグッドでした。しかし、この作品のテーマはお茶畑の景観にあるのではなく、川の流れの「音」や白鷺の飛び立つときの「写真」にあるという設定に目を見張らせるものがありました。第一章からエピローグまで全四章の語り手をひとつずつ変えていることもいい効果をもたらしているのですが、第二章は石田の語りでもよかったのではないかと思います。成長した石田の心中を描写する言葉がどこにも書かれていないのは、作品のテーマを敷衍するうえでマイナスだったろうと思うからです。第一章は丁寧に慎重にストーリーが進んでいきますが、第二章以降の軽い運びがラストの感動を薄めているような気がするのです。

次の『レッツ・オバンギャルド』（万願寺マサ子）は、四つの候補作のうち、私が無印（低評価）にした一作でした。この小説の最大の弱点はタイトルから受ける諧謔味が本文には存在しないことだと思います。タイトルのおちゃらけムードとは裏腹にきわめて真面目な内容と文章でした。マジメ一筋の言動が逆に笑いを誘うことは、筒井康隆の諸作でお馴染みの作法ですが（たとえば「関節話法」）、この作者にユーモアとウィットが備わっていれば、もっと読み手を楽しませる内容になったはずです。晩年に差し掛かってからの自転車教習の大変さを描くことと並行して、積年夫に忍従していたことへの振り返りと、関係改善の努力が描かれますが、最後あっさりと夫が折れてくる展開は安易ではないでしょうか。親友の名前を頭文字でMとだけ記すのも意味のあることとは思えません。ひょっとして、この小説は事実をそのまま題材とした一種の手記のようなものなのではないでしょうか。高評価できない理由がいくつもあったということです。

『波のゆく先』（橋爪志保）は、今回の一般部門候補作中で私が最高評価をした作品です。ただし、二重丸（◎）は私のみでした。文章の切れ、比喩表現、心理描写、いずれもピカ一だと思いました。小さいエピソードを重ねて、ストーリーを盛り上げる手腕も見事です。語り手の主人公が子供なので、小さな世界での出来事が綴られますが、そのなかでも主人公にとっては大きなショックと感動があるわけで、それが素直に伝わってきます。主人公の璃子が、父親は自殺したと思い込んでいたのに、実は心臓麻痺だったという新事実に驚くところなどがその好例です。冒頭に語られる安徳天皇の入水にリアルな苦痛を覚える心理が実は父親の事故死に結び付いていたせいだとか、巧妙に張られていた伏線を回収する技もわざとらしさから免れています。ただ、タイトルの「波のゆく先」は、一目で印象に残りませんか、再考されたほうがいいでしょう。

さて、圧倒的に高評価を得る作品が一作もないなかで、最高評価の二重丸（◎）は一人だったものの満遍なく票を集めたのは、『花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～』でした。読者選考委員賞との同時受賞も順当なところでしょう。次に注目されたのは全体の評価は決して高くありませんでしたが、最高評価が三人の『レッツ・オバンギャルド』でした。最終投票で、私も『レッツ・オバンギャルド』を再評価して、受賞に賛成しました。◎の委員が三人もいるというのは、やはり無視できなかったのです。平均的に高めの評価であるよりも、最高評価と低評価の際立った凸凹が作者の才能の証明であったケースを度々見てきた経験から判断しました。『花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～』との二作受賞も色合いのまったく違う者同士、バランスがいいとも思いました。

私が二重丸（◎）を付けて一番に推していた『波のゆく先』は優秀賞という評価になりましたが、当初◎が二人いて、満遍なく票を集めた『白鷺と新緑』が無冠という結果になってしまいました。あえて言えば、「ここぞ」とアピールする力に不足していたということになるのでしょうか。この作品の作者には捲土重来を期待するしかありません。